



オンリーワンに
磨きをかける

漆器や棕櫚製品など、伝統工芸が息づくものづくりのまちに拠点を構え、新しい感性でクリエイティブな活動に励む人たち。その圧倒的な作品・世界観の源泉を尋ねた。

ONLY ONE ARTIST 作家

キラリと輝く海南の作家

● **マイクロカーミュージアム WAZUKA 館長**
昭和レトロなミニカー専門博物館をオープン
海外からも注目される海南の名所がまた一つ



常時6、7台が並び、時期により車の入れ替わりあり。試運転はNGだが、運転席に座るのはOK。2階のカフェには関連資料やグッズが置かれている。



PROFILE

1978年生まれ。大阪府堺屋川市在住。高校生のときにマイクロカーと出会い、30代から収集を始める。ナショナルや山崎パンのレトロなラッピングで全国区の知名度を誇り、ミニカー愛好家が集うイベントも開催している。

マイクロカーミュージアム WAZUKA

〒940-0144 新潟県 新潟市 日方4-4-3 ② 非公開
※完全予約制 ※X(旧ツイッター) @kaorububu のDMで予約 ①
あり 要750円(未就学児無料)



長谷川薫さんはマイクロカーのコレクターとして、現在9台を所有。ラッピングのデザインを手掛け、エンジンが動くように整備した愛車の数々をSNSでアップすると、そのインパクトある姿が話題を呼んだ。マイクロカーは1970年代後半から、原付免許で運転できる小型自動車として販売。「燃費が良く、車検や車庫証明も不要。人乗りサイズで小回りが利き、主婦層を中心に人気がありました」。しかし、84年に

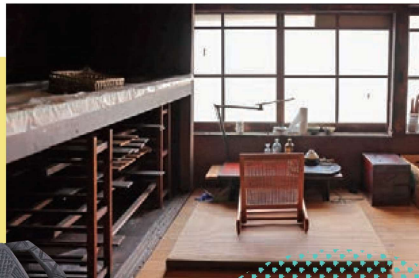
道路交通法が改正され、普通自動車の免許が必要になったことで需要が減り、メーカーが生産を中止。今では幻の車種に。 「実物が見たい」とのSNSの声に応えるため、和歌山出身の母の縁もあり、日方の漆器屋の元倉庫を自ら改装して、専門ミュージアムを開館。これまでに入館者数は300人ぐらいい。海外からも来てくれて、英国BBCなどメディアの取材も受けました」とも。各車の特徴や歴史的

背景など、長谷川さんの解説は造詣が深く、引き込まれ、つい長居をしてしまう。「基本的に予約制ですが、ミュージアム前に自転車が置いてあったら開館中、先客がいなければご案内しますので気軽に立ち寄りませう」。

● 木漆作家

梅田俊一郎さん

根来塗に導かれて黒江の伝統工芸を学ぶ
奈良で木地を作り、和歌山で漆を塗る



左／米国のシェーカーチェアと英国のウインザーチェアの工法を取り入れた、オリジナルファンバック・アームチェア。右／江戸時代から使われていた漆器間屋を工房に。漆を乾かす室(むろ)もある。下／木目を生かした塗りの色合いが美しい器。茶盆はアイヌの民族文化がモチーフ。



PROFILE

1976年北海道札幌市生まれ。2010年に奈良県立高等技術専門校に入学し、家具工芸を学ぶ。翌年に同県で家具工房「梅田家具工芸」を設立。2017年から黒江で漆器制作を始め、「梅田木漆工芸舎」を構え、2拠点生活を送っている。



奈良で家具工房を営む梅田俊一郎さんが漆器に興味を持ったのは、2013年に滋賀の美術館で見た根来塗がきっかけだった。「何度と磨かれるうちに、赤い上塗りが増え、中塗りの漆黒が器の表面に現れる。その何ともいえない趣に魅せられて」「それまでは家具づくりがメインだったが、器も手掛けるようになり、ついには「紀州漆器の本場」で学びたいと、地域おこし協力隊による伝統産業の後継者養成制度を活用して、17年に黒江に居を移した。

和歌山県工業技術センターの沖見龍さんと伝統工芸士の林克彦さんから指導を受け、現在は奈良で木地をつくり、黒江で漆を塗る分業スタイルで、創作活動に取り組んでいる。「家具づくりから漆塗りまでする作家は、珍しいかもしれないです」と、梅田さんは笑いながら話す。

築100年超の元漆器間屋を自らリノベーションした工房では、作品の展示やスプリングのワークシエールを不定期で行っている。4月5日(土)・6日(日)に、海南のアーティストらと共同で作品展を開催。開催情報や工房の場所はインスタ (@umeda.mokushikogeiya) で確認を。

● **絵本作家・イラストレーター**
すけのあずささん
その地に脈々と受け継がれているものを
移住者兼クリエイターの新鮮な視点で描く

みずみずしい色彩が心に染み入る絵本。郷愁をそよ原風景が描かれた挿絵。コミカルなタッチが笑いを誘うマンガ。すけのあずささんが手掛

PROFILE

1986年大阪府和泉市出身。京都精華大学芸術学部卒業。世界一長いネムーンや、紀伊野町での移住生活を経て、海南市で制作活動に励む。第21回ピンポイント絵本コンペ最後優秀賞受賞。著作絵本は「やぎのタミミはおかあさん」など3作。

BL出版



ける作品は、自身の人生経験と同様に多彩で幅広い。

大阪府出身。夫婦で約50カ国を巡った世界一周旅行で、山岳民族のライフスタイルに憧れ、帰国後は紀美野町に移住。築100年経つ古民家で、畑仕事やヤギの飼育が日常の田舎暮らしを体現し、「その土地の文化や手作りのもの、職人さんもそう。昔から脈々と受け継がれている事柄に興味があります」と話すすけのさん。絵本デビュー作の「うみのハナ」は、和歌山市難波崎の風習「ハナフリ」を題材にしたもので、毎日新聞和歌山版のイラストラム・カントリースケッチや、24年発行のグルメガイド「おいしい和歌山」でも、移住者兼クリエイターの視点で、和歌山の魅力を絵や文章で表現している。

すけのさんは「海南市に住みながら好きなことを仕事にできている」と、今後は福音館書店の月刊絵本「こどものとも」の作画に集中。自身の次作については、「小さな子たちが楽しめる内容に」とアイデアをためている最中だ」と笑顔で答えた。

右／最新作の「みずみずしいウィルビル」。グアテマラの民族衣装に魅了されて出来上がった一冊。24年12月には、串本町の田並劇場で、民族衣装をテーマにした原画の展示販売も行った。下／8年間連載が続いた「カントリースケッチ」に掲載された海南の風景。下津町大崎漁港の朝市の様子や、女の子が自転車に乗る黒江の町が生き生きと描かれている。



毎日新聞和歌山版